
HEAVEN GATE

RIO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H E A V E N G A T E

【Nコード】

N 5 1 5 2 N

【作者名】

R I O

【あらすじ】

新たな街に越してきた真理たち。

彼女らはそこで仕事を始めるのだが！？

朝岡真理を中心としたドタバタな日々が始まる。

第1話！！

あつい。

暑い。

あゝっゝいゝ！！

空は快晴、風はなく、気温は38度。

間違いなく今年一番の猛暑だ。

そんな中スーパーのレジ袋を両手に持ち道路を全速力で爆走している私は人からどのように思われているのだろうか。

・・・考えたくもない。

クソ、これもこれもみんなあいつのせいだ！

後ろをちらりと振り返えって見ると私の後方1メートルを走ってる子犬が一匹。

「もゝ！いつまでついてくるのよゝ！！」

かれこれ追いかけてすでに30分経つが、理由はいまだに謎・

・でもないか。

心当たりはある。

それはいまだこのレジ袋に眠る高級和牛だ。

あの犬がひつように追いかけてくる理由はおそらくコレだろ。

「ジョーダン、あんな野良犬にくれてやるもんか！これは私の肉だゝ！！」

もはや他人の目など気にせずさらにスピードを上げる。

汗は滝のように流れ服は肌につき気持ちが悪いがそれもあと少しの辛抱だ。

「見えた！」

前方に見えるあの赤い屋根は間違いなく私たちの家。

「うおゝ！！！！」

さらにスピードを上げる、ここまで来たらあとは一秒でも早く家に帰るだけ。

疾風のごとき速さは速度を上げたことによりもはや暴風のいきだ。

まっ、そんなわけで急に止まれるわけもなく勢いよく玄関のドアへと衝突した。

どっごーん!!!

まるで爆撃でも受けたような破壊音。

いったい誰がこれがただの衝突と思うだろうか・・・。

「いったゝ！もゝ受け身とるの忘れちゃったじゃない！」

辺りを見渡すとももの見事に玄関からリビングまでが半壊していた。越してきて半日でこのありさまとは本当、物の命とは儚いものだ。

「まっ、壊したものはしょうがないとして・・・」

腰を押さえ立ち上がるうとしたところでスリッパが飛んでくる。

「!？」

「これまた随分と盛大なご帰宅だな、真理？」

「・・・セナ」

見るとちょうど隣の部屋からセナが出てきたところだった。

「真理ちよつと話があるんだけど」

無表情のまま話すセナ・・・これはまたいつものパターンかなあ。

第1話！！（後書き）

「真理のセレナちゃん観察記録！！」の続編です。
相変わらずグダグダですがよろしく願いします。

第2話！！

「どうした真理？私は話があるといったんだけど？」

その場を動こうとしない私にセナが問いかける。

私だって動きたい、これ以上セナを怒らせるべきではないことは分かっているのだが、これだけは言っておかなければ！！

「あのセナさん誠に恐縮なのですが、私先ほどこの猛暑の中を走って帰ってきたため汗まみれなんですよ・・・」

「へえ、それで？」

「えっと、できることなら話の前にお風呂に入らせてもらえれば幸いなのですが・・・駄目ですか？」

「・・・」

くっくやっぱ無理かな？

このクソ鬼にそんな情あるわけ・・・

「・・・わかった。なら早く風呂に入ってこい」

「！！いいの？」

「へんな奴だな、自分から入りたいって言ったくせに」

「それは、そうだけど。アンタが私の言い分を聞くんてどうゆう風の吹き回し？」

少しは私のことも認めるきになったのかしら？

少しばかりそんな期待で胸を弾ませる。

「別に。ただ汗臭いお前と同じ部屋に居たくないだけだ」

冷たく告げるセナ。

ああ、そうだった。

さっき、自分でも言ってたじゃないか、コイツに情なんてあるわけないと。

「・・・」

「なんだ、またすねてるのか？」

「五月蠅いわね！私のハートは今ボロボロなの！！よく仲間に対し

てそんなこと言えるわねアンタ。何時か死ぬわよ私がストレスで！」

「そんなたまか、お前が」

フツと笑いまるで私のことなど考えてないセナ。

うつ、こんなにけなされてなんてかわいそうなヤツなんだ私は。

「こうなったらセレナちゃんに癒してもらうしかない！」

玄関に突っ込んだ時のスピードを軽く凌駕する速度でセレナちゃんの部屋へ向かう私。

フハハ、このスピードならさすがのセナもとめることは不可能だろう。

部屋のドアノブに手をかける、フフ。いざ楽園へー。

ガチャ。

開かれる楽園の扉その先に待ってたのは無人の部屋だった。

「ああ、言い忘れてたけどセレナ、時雨に呼び出されてていないぞ」

フンと笑うセナ。

ああこいつ絶対確信犯だ。

「ほら、騒いでないでさっさと風呂にいきな」

「・・・」

セレナちゃんとゆう唯一の希望を失った私は力なく浴室へと向かって行った。

第3話！！

「それにしても、随分と壊れたな。越してきたばかりなのに」

よろよると、風呂に向かった真理を見送った後、一人になったセナからはそんな言葉が漏れる。

しかしそれも致し方のないことだろう。

なんせ越してきたばかりの家を半日で同居人に半壊させられたのだから。

くるりと辺りを見渡す。

玄関は完全に壊れ家の中が丸見えの状態になっており、これなら泥棒も何の苦も無く侵入することができるだろう。

「まあ、この家にはとられて困るものなんて特にないけど。何時までもこのままにしておく訳にはいかないか」

フーと、軽いため息をつきおもむろに床に散らばっている木片を拾い上げる。

つと、なにかが目の前を通り過ぎる。

「ん、犬？」

そう、犬。

なぜか子犬が一匹目の前にちょこんと座っている。

私はあまり犬に詳しくはないから断言はできないが見た感じは雑種のようなのだ。

「なんだお前、こんなところで。いったいどこから・・・って一か所しかないか。とりあえずどいてくれ、其処にいたんじゃ掃除がでない」

少し可哀そうだがしっしっつと、追い払う。

でもこれは正しい選択だろう。

こんな家にいつまでも居たんじゃあの子犬の命に関わる。

さて、気を取り直して片付けの続きをやらないと。

結局片付けの終わるまでは三十分程かかってしまい予想以上に時間をくってしまった。

「クソ、この後修理もあるっていうのに」

そんな愚痴がついこぼれてしまう。

本当泣いてしまいたい気分だ。

「クウーン」

うん？

これは私の泣き声じゃないよな。

つということは。

そろりと目線を下に向けるとそこには案の定さっきの子犬が座っていた。

「お前、まだいたのか。ここに居たら危ないから早くよそに行けつて」

再び追い払おうとするが今度はなかなか余所へ行ってくれない。

「まいったな、懷いてくれるのは嬉しんだけど此処じゃ飼えないんだよ」

申し訳なく思いながら子犬の頭をなでる。

ん、意外とフカフカで気持ちいい。

もう少しなでていようと再び手を伸ばそうとしたところで、

「ふーん、動物には優しいんだセナって。ちよつと驚きかも」

と、今この現場を一番見られたくないヤツの声が響いた。

第4話！！（前書き）

今回あまり話がまとまっていません。

第4話！！

やはり日頃の行いというものは大切なんだと思う。

誰に見られていると言う訳でもないけど、それでも自分の行いというものは、自分にへとはね返って来るものなんだと思う。

な〜んていうのはどこかの小説に書いていたことでそんなものは実際あるわけないと思っていたのだけど・・・まさかお風呂から上がってこんな光景をお目にかかれるとは。

半壊した玄関。

その屋根が崩れ、まるで門のようになった玄関でセナのヤツが小さな子犬とじゃれていた。

その光景にすこし見入ってしまう。

それほどまでに珍しかったのだ、あの子があんな優しい表情をしているのは。

つとと言うか初めてかもしれないあんな表情を見るのは。

にしてもあんな子犬には優しい顔をするのになぜ一緒に暮らしている私にはあんな氷のように冷たい目を向けるのだろうか？

そこらへんはどうにも理解できない・・・。

けれど今はあの子犬に感謝をするべきかもしれない、おかげで私の知らないセナを見ることができたのだから。

これも私の日頃の行いが良いからだろっ。

ウンウン、と一人でうなずいて見せる。

さて、こうして眺めてるのも飽きたし、邪魔をするようで悪いがそろそろあちらに向かうとしますか。

フフ、さてセナはどんな反応をするだろうか。

第4話！！（後書き）

短くて済みません。

第5話！！

玄関で鉢合わせする私とセナ。

セナは私が急に現れたことに驚いたのか少しの間虚を突かれたような感じになっていたがすぐに状況を理解できたのか顔を真っ赤に染め上げワナワナと震えだした。

本当、今日はセナの珍しい顔が一杯見れるな。

何だろう、こんなことばかり起きて明日にでもこの星は吹っ飛ぶんじやなかるうか？

それで神様が私に思い残すことあがないようにとこのようなコトを？
だとしたらグッジョブよ神様。

セレナちゃんじゃなくてセナというところが少し気に入らないけど、あんなにオドオドしているセナを見ていると・・・へへ、これはこれでなかなか。

よだれなどは出ていないがなんだかしくずくにはいけない気がして袖で口元を拭う。

「ん、何か私変態っぽくない？」

そんなアホらしいことやること十数秒間、それほどの時間をセナにあげてしまったことが悪かったのか、それとも油断していた私のミスか、先ほどまで私の前で赤面していたセナは何故か私へと突進しこの美しい顔にドロップキックを炸裂させた。

ああ、一瞬でもこの子を可愛いなどと思った私が愚かだった。

「はあゝホントアンタってひどいわよね、まさかドロップキックを食らわされるとは思わなかったわ。しかも顔面に」

「それは悪かったってさっき言っただろ。いつまでも五月蠅いな。」

それにお前だつて家を壊してるんだそのことは大目に見るからこれでおあいこだろ」

むっ、それを言われたら確かにそうかもしれないけど、なんかあまり謝れている気がせず釈然としない。

けど、足蹴り一つで許してもらえるならこれは儲けものかもしれないな。

「まゝ私は懐が広いからあまり深くは追及しないであげるわ」

ソファーに座り足組しながら話す私はまさにどこぞのセレブのよう。うゝん、いい感じ。

初めてセナより上に立っている気がする。ふふ。

「じゃあ、この話はここまでだな。本題を話すぞ」

そんな私の思いを華麗にスルーするセナ。

まっ、いいんですけどね。

「ああ、本題つてあれでしょ、時雨からの指令。でっ、内容は？」

「・・・・・・・・」

「どうしたのよセナ黙っちゃって。そんなに難しいの？」

「ああ、私はともかくお前とセレナには無理だと思う」

当たり前のように言うセナ。

そんな態度が気に入らない。

「へー言うじゃない。アンタにできて私にはできない？面白い！だったらそんなもん私一人でやってやろうじゃない！！」

うゝ、我ながらカッコイイ。

こつ言つた事はビシツと言って私の威厳を保たないと。
ふふ、セナなんかあんなに目をぱちくりさせて。

「本当に良いのか？」

「ええ、女に二言はないわ！で、内容わ？」

「ああ、何でも困つた人を助けなさいだってさ」

「・・・はい？」

第6話！！

「あゝ暇ね」

今日記念すねき第一声はそんな下らない一言から始まった。

「そんなに暇ならなにか仕事でもすればいいのに」

私のボヤキに反応しセナが言葉を返す。

「あのね、その仕事が多すぎて入らないから困ってんでしょうが！」
そう、指示通りこの家を改築し仕事場にて何でも屋のよな自営業を始めたのはいいがこれが多すぎると言っていていいほど客が来ないのだ。多すぎ、こんなにかわいい子が働いてるのに世の男性は見る目がない。

「仕事が入らないのは単にお前の対応が悪いからだろ？それとも客がお前を見て逃げ出しているからだ」

「なっ！！失礼な！それはセナも当てはまることじゃないの」

「私は客と会わないようにしているから原因はお前だよ」

ふふつと笑いながら言うセナ。

くく！なんて憎々しいんだ。

「うっ、この卑怯者！」

「なんとでも、とにかくこれは真理が任せられたことなんだからちゃんとやれよ」

そうして玄関へと歩いていくセナ。

おそらく郵便でも見に行ったんだろう。

「んゝ、任されてもねゝ。こうもあてがないと完全にお手上げなよね」

ハアゝつと深々とため息をついていると玄関からセナが戻ってきた。そしてそのまま無言で私に白い封筒を差し出してくる。

「なっ、なに？」

その不可解な行動について臆してしまう。

「いいから読め。真理宛だよ」

「私イ？」

自分宛となれば受け取らないわけにもいかず、恐る恐る手に取ってみる。

うん、どうやら開けた瞬間に爆発なんてことはないようだ。

ホッと一息。

しかしまだ油断は禁物。

今度は恐る恐る中身を確認しようとしたところで、ガッ。

つとセナの蹴りをくらってしまった。

「早く読めよバカ」

「うっさいわね！いま読むわよ！！こっちも心の準備が必要なのよ！」

こうなったらヤケだ。

手を封筒に突っ込み一気に中身を引っ張り出す。

出てきたのは一枚の手紙。

「うわ、汚い字」

「なんて書いてるんだ？」

セナも興味があるのか身を乗り出してくる。

「まって、今読むから」

手紙を開くとそこには短くこう書かれていた、

『ヘブン・ゲートを探して』と。

第7話！！

「ヘブン・ゲート？」

聞きなれない単語を口にする。

セナの方を見るとこちらも分からないと首を振る。

変な知識はあるくせにこんなことは役に立たない。

まっ、それがセナらしいと言えbraしいが。

「で、どうするんだ？この依頼」

そんな私の考えを見抜いてかそうでないかは分からないが、セナの
声が私の思考を遮る。

「どうするもなにも、こんな訳の分からない手紙一つじゃね、お
金もないみたいだし」

「あるみたいだぜ、お金」

「えっ？」

お金があるという事実にも驚いた私だったがその金額にはさらに脅
かされた。

封筒からセナの手へと転がり出るコイン、その鈍い輝きが目に入り
込む。

「ごっ、五百円！？」

「そう、五百円」

正直ドン引きするほど少ない金額だ。

よくこれで仕事を頼もうと思ったもんだ。

「けれど確かに金は払われた」

ものすごくいいタイミングで言葉を返してくるセナ。

コイツは私の心の中が読めるのだろうか？

そう思い顔が少し引きつる。

「確かにお金はもらったけどいくらなんでもこれは少なすぎでしょ。
こっちも慈善事業でやってるわけじゃないんだから」

「似たようなもんだと思うけど・・・それにこの店金の指定なんて書いてないじゃないか。ならこの五百円でも文句は言えないだろう」

「それを言われると・・・」

うう、確かにめんどくさがってお金の指定をしなかったのはマズったかな？

だとしてもこんな仕事を受けろだなんてセナは少し真面目すぎなんじゃないだろうか？

やる気なセナには悪いがどうも気乗りしない、なんとか逃げ出す道を考えては。

「そつ、そう言うけどさ、セナは知ってるの？」

「なにを？」

「だからヘブン・ゲートがなんなのかを」

「・・・」

よしよし、何も答えないということはセナも本当に知らないということだろう、ならここから攻めるか。

「ほら、私もセナも分からないんじゃないでしょうか？だからここは、この依頼はなかったことに・・・」

「都市伝説」

私が言い終えるまえにポツリと無感情な美しい声が割り込む。

その聞き覚えのある声に。私とセナが同時に振り返る。

「セレナちゃん!!」

そこには白い髪に灰色の瞳、そして白いジャージを着たセレナちゃんが立っていた。

第8話！！

「お帰りなさい！！！」

セレナちゃんが帰ってきた！

その喜びを噛み締めながら反射的にセレナちゃんへと飛びつく。

あわよくばその唇を奪うつもりで。

けれど世の中そう、うまくはいかない。

ひらりと優雅に私の飛びつきを躲すセレナちゃん、結果として私は壁に顔面沈めることになってしまった。

しばらく続く静寂、私は壁に沈んだまま微動だにしない。

途中、セナが私に対し『アホ』だのなんだの言っていたが、ここはグツとこらえることにしよう、もうしばらく待てばおそらく。

「真理、大丈夫？」

キタ！！

何時までも動かない私を心配してセレナちゃんが近づいてくる。

ふふ、まさに計算通り。

そう、最初の飛びつきはあくまでオトリ。

本当の狙いはこっちにあったのさ！

私を心配し近づいてくるセレナちゃん、その純情無垢な唇を奪い去る。

ふふふ。

なんて壮大で偉大な計画。

足音は徐々に近づいてくる、あと少し、もう少しで……。

だんだんと脈拍が上がってくるのが自分でも感じられる。

ぴたりと私の後ろで止まる足音。

今だ！！！！

「セレナちゃん！！！！」

全運動神経を駆使してセレナちゃんへと襲い掛かる！

瞬間唇に広がる柔らかい感触。

ああ、ついにあの夢にまで見たセレナちゃんの唇が私のモノに。いったい、セレナちゃんはどうな顔をしているだろう？

驚きに目を丸くしているだろうか？

それともいつものように無表情で立っているだろうか？

できれば笑顔で私を包んでほしいな。

そんな妄想を胸に瞼を開くとそこには、謎の茶色い毛が。

こ、これはいったい？

とてつもなく嫌な予感がするが恐る恐る唇を離し、その物体を直視する。

ああ、こういったときの嫌な予感は見事に当たるものね、そこには予想通りあの犬ところがクリクリした目でこちらを見ていた。

なんだ、つまり私がキスした相手はつまり・・・。

「うえ」

理解と同時に必死に自らの唇を拭う。

「な、なんでこの犬ところがこんなところに！」

「なんでって、真理が急に、襲ってきたから、この犬で、止めた、ただけだよ？」

あいも変わらず無表情に淡々と語るセレナちゃん、その姿があまりにも可愛らしく、

「そっか、止めただけか、ならしょうがないね！」

犬とキスしたことなんか一瞬にして忘れてしまった。

「で、コントは済んだ？」

タイミングを見計らっていたのだろう、セナがここぞとばかりに口を開いた。

「なんだセナ、アンタまだいたんだ？」

「ああ、さつきからずっと。そんなことよりセレナ、お前へブン・ゲートが何なのか知ってるのか？」

セナの言葉でハツとする。

そつだ、セレナちゃんが帰つてきたことで歡喜し忘れていたがセレナちゃんは確かに言つていた、ヘブン・ゲートは都市伝説だと。

一斉に視線がセレナちゃんへと移る。

「知つてゐる、つていう程でもないけど、……ちよつと、こつち来て」

そう言い、セレナちゃんは自らの部屋に向かう。

えっ!?

これはもしや部屋に入つてもいいという事ですか？

何のためらいもなくセレナちゃんの後へと続くセラ、そのあとを追うようにして私もその秘密の花園へと足を踏み入れたのであつた。

第8話！！（後書き）

登場人物紹介

・朝岡真理 - アサオカ・シンリ-

19歳の少女。

身長170cm

かなりの美人。

好きなもの セレナちゃん

苦手なもの セナ

・セナ

17歳位の少女。

冷たそうだが、周りをよく気に掛ける。

恐ろしいほどの美人。

セレナとは双子らしい。

セレナとは異なり黒髪に黒目。

・セレナ

年齢 17歳位。

無感情、無表情。

真理達が所属している組織では一番強い。

嫌いなもの うるさいもの。

恐ろしいほどの美人。

セナとは異なり白髪に灰目。

第8・5話!!（前書き）

今回あまりに短く話も進んでいないので8・5話とさせていただきます。

第8・5話！！

初めて入るセレナちゃんの部屋。

一体どんな部屋なんだろうと、想像をしては胸が高まっていく。

そんな私とは対照的にあくまで平静を保つセナ。

こちらは関心はどうやらセレナちゃんの部屋にはなく、『ヘブン・ゲート』の方にあるようだった。

やれやれ、まったく理解に苦しむ。

どうしてそこまであんな手紙に真剣になれるのか・・・。

真理はそう、セナのことを少しばかり冷やかな目で見る。

・・・いつも馬鹿にされているのだからこのくらいしても許されるだろう、またセナに心を読まれているのではないかとそんな弁解も一応は入れておく。

長いことセナに罵倒されてきたせいだろう真理自身も自分がだんだん小心者になってきているのを感じていた。

「何ボツーとしてるんだ真理？早くは入れ」

頭に響くようなセナの澄み渡った声、そこで私の思考は遮断されてしまう。

気づけば白い扉の前にいた。

ゴクリと生唾を飲む。

間違いない、ここが夢にまで見たセレナちゃんの部屋。

ヤバイ、どうしよう余りの嬉しさで体が動かない。

うゝ、入りたいのに入れない。

この感じ、まずいコーフンするかも。

つつい息遣いが荒くなるのを止められず、そんな私の心情を見透かしたセナに蹴りを入れられる形で私は部屋の中へと押し込まれる。初めて入るセレナちゃんの部屋。

そこは私の想像を超える異界だった。

「！！」

部屋は完全な暗闇だった。

光が入りそうな窓は全て布により塞がれてしまっている。

床には毛布が敷き詰められており床の固い感触は完全に消え失せている。

また、家具と呼べるものは一切なく服も辺りに散乱してしまっている。

「こ、これはまた・・・」

なんといえぱいいのだろうか状況を？

だらしない？ゴミ屋敷？引きこもりの部屋？

うーん、どれも当てはまりそうでもうにもピンとこない。

セレナちゃんの部屋はそんな何ともいえない雰囲気をかもしだしていた。

そんな部屋の隅っこに隠れるように座るセレナちゃんが無言のまま私たちを呼んでいた。

第9話！！（前書き）

話に少し展開があります。

第9話！！

人の部屋はその人物の内面をあらわしているという話をどこかで聞いたことがあったが、もしその話が真実というのならはこの部屋はまるで全てを拒絶しているように見える。

いや、これは拒絶というより遮断という方がしっくりくるような・・。

そんないつもなら思わないだろう感想を抱きつつ私と真理は部屋の隅に座るセレナのもとまで歩み寄った。

途中、真理にヤツがセレナの下着を見つけ狂乱していたが、アレにかまっていたら話が進まないのであえてほっとく事にする。

「でつ、ヘブン・ゲートについて一体なにを知っているんだ？セレナ」

あい変わらず口を開かないセレナだがしばらくするとおもむろに辺りをゴソゴソと漁り始める。

どうやら何かを探しているようだ。

物色を続けること約一分、こんなに手間がかかるくらいなら整理整頓ぐらいいしろ言いたくなるのを抑えつつセレナが取り出したるソレを拝見する。

「パソコン？」

そう、そこには何の変哲もない一台のノートパソコンがあった。

「へえ、セレナちゃんパソコンなんてやるんだ。メモメモと」
何時の間に来たのか真理が興味津々という面持でなにやら手帳に書き記している。

なるほどアレがシンの言っていた真理のセレナちゃんノートか、なんでもセレナの情報を事細かに記しているのだとか。

（おぞましいほどの執着だな・・）

ちなみに、内容はあまり見ない方が良さそうだ。

「パソコンなんて取り出してどうするつもりだ？」

「……」

セレナは黙してたままただキーボードを打ち続ける。

（それにしても、随分と早いな。打つの）

軽やかにまるでピアノを弾くかのごとく動くその指にしばし見とれていると、ここを見ると言わんばかりにセレナが私たちの方へと画面を向けてくる。

「なに？都市伝説調査隊」

画面いっぱいにつつまる文字を読み上げる。

黒い背景に赤い文字という不気味な演出。

血を連想させる赤文字が目に刺さり痛い。

これらの事に若干の不快感をおぼえていると、

「なになに、このサイト！なんか面白そうじゃん！！」

先ほどまでまったくの無関心だった真理が突如として湧いてきた。

（ああ、そういえば真理は、この手の噂話が好きだった）

「ふーん、結構色々な都市伝説があるのね」

「うん。このサイト、全国の、オカルトマニアたちが、随時、情報を、提供している、みたいだから」

「へえ。なになに、『人を喰らうマンション』『時を操る時計塔』

『恋を叶えるお地蔵様』『右腕の悪魔』『赤髪の吸血鬼』、なかなか面白そうじゃん」

別にオカルトマニアでもない真理だったがこの手の話には夢がありそこに個人個人の思いが感じられつついつい見入ってしまうのだと以前本人が言っていた。

この話が嘘なのか本当なのかなんてことはどうでもいい、そこに人々の夢があり自分が楽しければそれでいい。

まあ、ようは自分が楽しめたら何でもいいんだろうこの女は。

「真理。ここの記事の、一番下、見て」

セレナの指示どおり記事の一番下を見る真理。

「これは・・・」

止まる真理の指、いくつもの嘘か本当か分からない記事たちに埋もれるかのようにそれはあった。

ほかの記事とは明らかに違い詳しい詳細は何一つ書かれておらず、ただ一文、

「死者を蘇らす扉。ヘブン・ゲートか・・・。これがセレナの言つてた都市伝説なのか？」

コクリと頷く肯定の意を示しているのだろう。

「うん。自分が、心当たりが、あるのは、コレだけ」

「そうか、真理はコレどう思う？」

「どうって・・・。別にいいんじゃない？夢があつて。死者を蘇らすなんて人類の長年の夢でしょ？都市伝説なんだし信じたいヤツだけ信じれば良いじゃん。まあ、私はこういつたウワサは見るだけで信じはしないんだけどね」

ヒヒと下品に笑う真理だがこの意見はほとんどの人間が持つものではないのだろうか？

誰だつてそうだ幻想はあくまで幻想だと割り切れる。

幻想を真実にするのは自分にとって都合のいい時だけで用が済めばそれは再び幻想にもどる。

ウワサなんてほとんどがそんなものだろう。

信じたい者だけが信じればいいだけ、このヘブン・ゲートもそんなウワサ達の一つにすぎないだろう。

死者の復活を望む誰かが作り上げた一つの幻想。

それだけのモノ・・・それだけのモノのはずなのだが・・・。

「どうにも気になるな・・・」

「気になるって何が？」

反応する真理の意見はもつともだ、私だつて何が気になってるのかよく分からないでいる。

ただ、

「ただ、何だろう。このウワサ見逃したらいけない気がする」
それは勘の様なもの。

根拠なんて何一つない酷く曖昧なモノ。

けれど何か本能的なものが私に決して見逃すなと訴えてくる。

「えっ？まさかセナ。あの依頼・・・」

「ああ、受けることにしよう」

経験上この手の勘には逆らわないようにしている私は真理の問いに即答する。

初めっから乗気じゃなかった真理は露骨に嫌な顔をするが、これはもう決定事項なので無視することにする。

「セレナ、ほかに何か情報は？」

「ない」

こちらも即答だった。

そのあと他のサイトなどもあたりはしたが結局成果は上がらず、これはもう地道に探すしかない諦めかけたとき、セレナが意外な情報を口にした。

「このサイトの、管理人。ウワサの、調査を、自分なりに、やっている、見たい。会えば、何か、教えてくれるかも・・・」

第10話！！

セレナからでた意外な助言。

他にあてがあつた訳でもないしとりあえずはダメもとでその管理にとやらを探すことにした。

幸いにも管理人の所在はシンが調査してくれたこともあり割と簡単に掴むことができたのだが・・・。

「ねえー本当にこんな所に人が住んでるの？」

真つ先に疑問を漏らすのは真理、何時もならこんな文句は無視するのだが、この場所を見るかがりでは正直なところ私も同意見だ。

なんせ今私たちが侵入している場所はどこをどう見ようと廃病院以外のなにものでもないのだから。

シンの調査によればなんでも十年程前に廃業し、その後何度も取り壊しが行われたがその度にけが人が出るという事で今に至るまで残されているという。

「ねえーもう帰らない？こんなところに人なんて居るわけないよぉ。調べるだけ無駄だつて、それにここかび臭くて気分悪いし」つて、ひゃー！」

急に短い悲鳴をあげる真理、見ると何やら盛大に尻餅をついている。

「どうした、バナナの皮でも踏んだか？」

「そんなわけないでしょ！・・・って言いたいけど、どうやらその通りみたい！」

イタタとお尻を擦りながら立ち上がる真理。

見ると右手に鮮やかな色をしたバナナの皮を握っている。

「もぉー！！なんでこんなものが！」

怒りに身を任せバナナの皮をガラス窓に投げつける真理。

投げつけられたバナナは無残にも窓に張り付く形で潰れゆく。

それにしても、冗談のつもりだったのだが、まさか本当になるとは。

うん、こんな状況をつくりだす真理は素直に凄いと思う。

「だけど、そんなモノが、落ちてるなら、人がいるっていうこと、かな？」

今回珍しく一緒についてくるなんて言い出したセレナがここにきて初めて口を開く。

「ああ、少なくとも人の出入りはあるみたいだ。そのバナナもごく最近のモノのようだしもうしばらく調べる必要性がありそうだ」

「えゝ、マジで言ってるわけ？勘弁してよ、私はいい加減こんなボロ臭い所オサラバしたいんだけど」

「ありや、ボロ臭いとは心外だなあ。こんなところでも慣れれば結構快適なんだよ、お嬢ちゃん」

「！！」

突如として暗い廊下に響き渡る男の声。

（どこからか見られてる？）

得体のしれない相手に身構える私と真理であつたが、その人物はあつてなくその姿を私たちの元へと現した。

声からして分かり切っていた事だがやはり男性、気だるそうな表情と無精ひげが印象的な恐らくは三十代後半と見える中年男性だった。「へえゝ、こんな所に客が来るなんて珍しいねえゝ。ただ迷い込んだだけかな？それともなにか用があつたのかい？可愛いお嬢ちゃんたち」

ニヤニヤと笑う口元とは対照的に鋭く光る男の眼、どうやら私たちのことを不振がっているようだ。

まあ、それはこちらと同じなのだが。

「ちよつと、人探しを。あるサイトの管理人がこのあたりに住んでいるという話を聞きました、もしかしたら会えるかと思ひ」

「ふゝん、サイトの管理人ねえゝ。もしかしてだけどさあ、そのサイトって都市伝説調査隊なんて名前だつたりするかな？」

ちょっと恥ずかしそうに頭をかきながら聞く男の態度から察するにおそらくはこの男が・・・。

「じゃあ、アンタが管理人なわけ？」

「ビンゴ、その通りだよ。それにしても、こんなところまでお客さんが来るとはねえ」。しかもそろって美人ときた。いやはや、まいったなあ。僕に一体何の用なんだい？お嬢ちゃんたち」

ニヤリと笑う男の視線はまるでこちらの体を這うようで居心地の悪さを感じる。

まるで魂を舐められているかのような錯覚。

真理も同じ気持ちなのだろう、不快な顔をし黙っている。

「どうしたんだい？黙っちゃって。こんなところまでわざわざ来てくれたんだ、僕が答えられることなら答えてあげるよ。特に君たちみたいな可愛い子にはね」

「なら、聞く。ヘブン・ゲートについて、教えて」

そんな中唯一男の目線に対しても平然としていたセレナが声をあげた。

あれだけの不快な空気に反応しないなんてセレナはあの目に気づいていないのかとも思ったが、いやそうではないとすぐに否定する。セレナも気づいてる間違はなく私たちと同じようにならなせ何の反応も示さないのか？

答えは簡単、この子は常人なら誰もが不快と思うだろうあの目線を何とも感じなかっただけ。

いや、感じられないのか。

「ヘブン・ゲート？ああ、例の都市伝説のことだね。うん、僕もそう詳しく知っている訳じゃないが・・・いいだろう話してあげるよ。女の子と話すなんて久しぶりだしね、ついておいで、お茶くらいはだすよ」

有無言わず暗い廊下に姿を消す男、その少し貧相な背中を見失わぬよう私たちも後に続いた。

「さえさて、じゃあ、話を聞かせてもらおうかな」

暗い廊下の先、男が自らの部屋だと入っていったのは、以前は診察室として使われていたと思われる一つの個室だった。

この部屋も清潔感などはなくかび臭い空気に包まれている。

ただ部屋として使っているというのは嘘ではないようでほかの部屋とは違い僅かにだが生活の後が見られた。

その部屋に一つだけある机に男は腰掛け、私たちはその目の前にある診察台に座らされた。

ちなみに、男が出してくれたお茶はそこいらの自販機で買ってきたと思われるただのペットボトルであった。

「……ってかさあー、随分と話がスムーズに進んでない？なんでアンタ初対面の私たちの話をこつもあつさり聞く気になったのよ？ちよとおかしいと思うんだけど」

真理の疑問はもつともだ、こういった信頼関係のない上での話し合いは互いの利害が一致し初めて成しえるもの。

そういった意味ではこの話を聞いてもなんの徳もない彼はそもそも私たちの話を聞く必要性すら無いのだから。

ならば彼は何故？

よもやただのお人よしというわけでもあるまい。

「あれ、そんな風に人を疑うのは良くないよお嬢ちゃん。せつかく善意から教えてあげてもいいって言ってるのに」

そう語る彼だったが、その口調が余りに軽口めいており真偽のほどが区別できない。

なんとも嫌なヤツだ。

「本当にただの善意か？」

「もちろんだとも！まあ、しいていうなら君たちが何をするつもりなのか興味があったというのもあるかな」

「どういうことだ？私たちが何かをするだと」

「そのままの意味さ、お嬢ちゃんたちが本当にただのオカルトマニアでお遊びでこんなことをしているんだというなら僕も無視しただらうね。けどそうじゃないだろ？」

男の言葉には何か確信めいたものが感じられなぜだかソレを強く不安に思ってしまう。

いったい何が言いたいんだこの男は。

「それは一体？」

「あれ、それを僕に聞くの？まいったなあ、今のは勘の様なものなんだけど・・・」

「嘘だろ、お前はそう思うだけの何かを掴んで言っている。違うか？」

「掴んでるなんてそんな大それたことじゃないよ、お嬢ちゃん。ただ面白いことに気づいただけさあ」

「面白いこと？何だそれは？」

「ここでようやく気づく、この男はその何か面白いことを言いたいのだ。」

そしてそれは恐らく私たちに関わりのある何か。

「いやただね、この部屋にいる奴らってさあ、みんな種族が違うなあ、なんて思っただけ」

「！？」

ひときは鋭く光る男の眼、今確信は真実を口にする。

「こんなことを言うのは差別的で嫌なんだけどさあ、お嬢ちゃんたち人間じゃないでしょ？」

瞬間、空気が凍てつくのを誰もが感じた。

第11話！！

さて、ここで一つこの世界についての話をしよう。
今この地球上には数多の生物たちが共存している。

まさに生命の星といってもいい程に。

そんな数多くの種のなかでもっとも優れたモノたち、それが人類。
多くの者たちがそう思っているだろう。

だがこの認識は間違いだ。

確かに今地球を支配しているのは人類だろう。

これは否定できない事実。

しかし支配しているイコール最も優れているという訳ではない。

そう、この世には今の人の手には有り余るほど強大な力を有している者たちが確かに存在する。

人はそういった自分たちでは及ばないモノを神あるいは化物と恐怖するのだろう。

幻想上の生物もおそらくは彼らのことだろう。

それほどの力を持つ彼らだが決して人間のように表に出てくることはなかった、なぜならそれが彼らの唯一の掟だったからだ。

故にその存在が世間にしれれることもなかった。

なのになぜこの男は。

「お前何者だ？」

静かな殺気を向けるセナは口調こそ穏やかだが男を睨みつける眼はその視線だけで相手を殺すと思わせるものがある。

それもそうだろうなんせ私達の存在は絶対の秘密なのだ。

それが一般人に知られるようなことがおきたらその時は……。

ゴクリと唾を飲みながらセナを見る。

一切の感情が抜けたようなその顔からはもう殺意しか感じられない。間違いなく殺るきだ。

私が今後の展開が予想できたころ再び男が陽気な声で語りだす。

「いやだなーそんな怖い顔して。せっかくの可愛い顔が台無しじゃないか」

「質問に答えろ。なぜ私たちのことが分かる」

答えなければ殺す。

言葉にこそ出していないがそんなことはもはやこの場の誰もが感じとっていた。

むろんあの男も。

それが分かってだろう男もその質問に答えるという意思表示を見せるが、口調は全くの軽口のままだった。

「ハハアー、怖いなー本当に。まあ、でも隠す必要もないし・・・うん、答えてあげるよ」

言いながら男は自らの眼を指差した。

「答えはこの眼だよ。一応いつとくけど僕は別にお嬢ちゃん達のような人外が存在でもないし人を捨てた身でもない。けれど少しばかり特殊な眼をもっていてねえー。見えるんだよモノの魂が」

「!!!お前、異能者か」

驚きの声は一体誰のものだったか、それほどにその事実是我们たちからすれば意外なものだった。

異能者。

それは人の身でありながら人外の力を手に入れた者たちの総称。私たちと似たような力を持つ人類の進化の可能性の一つともいえる

存在。

とはいえ所詮は人の身、鬼神や鬼人ほどの能力行使はできないがそれでも力の強いものは単身で人外のモノ達ともわたり合うほどの力を持っているのだとか。

そしてその力は私達のようにいくつかの種類があるんだとか。

「それで、魂をその眼に見る。それがお前の固有能力というわけか」
「とらえるというより、単に魂なんていうファンタジーなものを物質として見る事ができるだけなんだけどねえ」。何の因果か知れないけどこんな能力を持つて生まれた僕って不幸？けど、それ以外は普通の一般人と変わらないのだから暴力は勘弁してねえ」

この状況であいも変わらず軽口を叩けるこの男が一般人とは思えないが、もしこの男が本当に異能者ならおそらくは能力以外は人間と変わらないというのは本当だろう。

そう所詮異能者は能力を持っただけの一人間。

身体的な面は決して人の域を出ることができない。

「お前の異能についてはとりあえず分かったが、なぜそれが私たちの正体に繋がる？魂は生きているモノには等しくあるものだろ。そんなものじゃ区別はつかないはずだ。まさか、私たちには魂がないなんていわないよな」

「ああ、そこは大丈夫お嬢ちゃん達の魂もちゃんと見えているから」
「じゃあ、なぜ？」

「うーん、見えていないお嬢ちゃん達に説明するのは難しいけど。まあ、しいて言うなら質かな？僕の眼はモノの魂が見える。それはたましいのあるモノなら全てにいえることだ。けどすべてのモノがみんな同じ形をしているワケじゃないんだよねえコレが。人には人の植物には植物の虫には虫のつていう風に個々の姿をしている・

・
」

ここまで聞きセナは男の言い分が理解できたのか言葉を止める。

「なるほど、そして私たちを見たら人の魂の形をしていなかった。

そうゆうことか？」

「正解。それで、お嬢ちゃん達のことを知った僕はどうなるのかな？ やっぱ極刑かい？」

少しも恐れた風もなく聞く男にセナは予想外の言葉を繰り出す。

「別に、どうもしない。それを知ったところでお前は何もできないし何もする気見ない。一般人なら消してたけどそれでもないし、ほつとくさ」

「へえ、けっこう優しんだ。僕みたいなヤツは早めに対処した方が良いと思うけど？」

皮肉を込めて笑う男、そしてそれを聞き流すセナ。

そんな二人の様子をしばらく黙っていた真理だがここにきてもうこんな話は飽きたと言わんばかりに急に診察台から立ち上がった。

「あのさあ、別に私たちはアンタのことを聞きにきたワケじゃないんだからさあ、そろそろこの話は終わりにして本題に入んない？ いい加減こども飽きてきたんだよね」

「おやおや、先に話を脱線させたのはお嬢ちゃんだろ？ それなのにわざわざ答えてあげたのにそんな言い方されると傷つくなあ」

「うっ、うるさいな！ そんなへらへらしててどこが傷ついてんのよ！ いいから早く言いなさい。セナが見逃しても私が潰すわよ」

本気ではないがここでとりあえずはつたりをかましておく。

けどこういったはつたりはけっこう聞くものなのか、

「まったく、そうせかさないでよ、ちゃんと答えるから」

と、早々に答えてくれた。

「まあ、さっきも言っただけで僕もこの都市伝説については詳しく分からないんだよ。あまり広がってないというか、出処がはっきりし

ない感じなんだよねえ。・・・それにこのウワサ・・・」

そこで男はいったん言葉を止めるがすぐに何かを自分に言い聞かせるかのように頭を振ると、再びあの軽口で話し出した。

「でっ、これからお嬢ちゃん達はどうするんだい？この通り僕は全くの役立たずというワケだけど」

「どうもしないさ。お前が駄目なら他の方法を探す。それだけさ」随分とカツコよく言い切ったセナだったが内心は舌打ちをしたい気持ちだった。

なんせ最後のあてが外れてしまったのだから。

まさに八方ふさがりという訳だ。

もう真理のいうようにこんなウワサほっとしてしまえば良いのだろうがどうにも消えない胸騒ぎがセナの決断を躊躇わせる。そんな中男がまた奇妙なことを言い出す。

「お嬢ちゃん、ここで一つ提案があるんだけどいいかい？聞いて損はないと思うけど。それとも僕みたいな役立たずの話は聞くまでもないかい？」

男の態度は明らかにこちらを誘っている。

もはや挑発しているといってもいいくらいだ。

だが、

「いいだろう聞いてやるさ。何をたくらんでるかは知らないけど、どうせ他にあてはないんだ」

「いや、話の分かるお嬢ちゃんで助かるよ。へへ、じゃあ率直に言うけど僕と協力してみないかい？」

「協力だと？」

「そう、このヘブン・ゲートの話は前々から僕も気になってね近いうちに自分なりに調査を始めようと思ってたんだよね。んで、もし僕のお願いを聞いてくれるならこっちで何か分かり次第情報を提供しようと思うんだけど、どうかな？悪い話じゃないだろ」

「ふん、それは条件次第だな。いったい何を突きつけるつもりだ」

口調こそぞんざいだがセナの言葉にはもはや敵意のようなものは感じられない、どうやら彼女も彼女なりにこの状況を楽しんでいるようだ。

「つきつけるなんて。僕は協力者だよ？そんな強要はしないさあ。ただ少し見てもらいたい子がいてねえ。・・・おゝい入っといで」その呼び声に反応するかのように私たちの横のドアがゆっくりと開いていき、密室の重苦しい空気を洗い流すかのような隙間風が流れこんでくる。

そんな清らかな空気を運んできたのは一人の少年だった。

まだ子供といった方がいいような幼い顔立ちをしたこの子は一体？

「あゝ紹介するよ。この子はユウといってワケあって少し前に僕が引き取ったんだけど、なにぶん子供の相手は苦手でね僕は。そこで悪いんだけどお嬢ちゃん達で引き取ってくんないかな？へへ、僕からの条件はコレということで、一つヨロシクネ」

第12話!!（前書き）

この話から第二部に入ります。

第12話！！

「いったいどうして、こんなことに……」

ため息とともに出るそんな一言。

正直、いまだに状況を呑み込めないでいる。

なぜ僕は先ほど知り合ったばかりの女達の家へと向かっているのだろうか？

・・・何もクソもない！

全部あの男のせいだ！！！

思えば前兆はあったのだ。

いつもなら僕が何をしようと文句ひとつ言わないあの男が今日にかぎって部屋から出るなんて言うんだから。

それに気づけないなんて甘かった。

だからこんなことになるのだ。

こんなワケのわからないヤツラと暮らすハメに！

「ねえ、セナ。本当にこんなガキ引き取るわけ？どうゆうことよ」

「しょうがないだろ、それが協力の条件だったんだから」

「だからそれがおかしいのよ。なんだってあんなヤツに協力なんか求めたのよ。いつもならあんな申込みバツサツリ切るアンタが」

「少し気になる事があってな」

「ふーん。どうせ聞いても答えないんでしょ。まあ、いいけどさ、また面倒な事じゃないでしょうね。もうカンベンだからね、こんな厄介ごとは」

「なら僕なんか、引き取らなかつたら良かったじゃないですか」
なんなんださつきから、僕だって好きでついて行ってるわけじゃないのに。

そこまで邪魔者扱いされるいわれはない！

「なによアンタ、やけに突っかかる言い方ね。私達は家のないアンタを拾ってやったワケよ？感謝こそされてもそんな風に言われる覚えはないんだけど」

「誰も拾ってくれなんて頼んでないですよ」

「ア、アンタねえ」

「やめておけ真理、ここでケンカなんてしても仕方がないだろう。あと・・・」

ギロリとこちらを向く漆黒の髪の女。

美人なだけにそう睨まれるとものすごく怖く見える。

「な、なんですか」

「お前もウジウジうるさい。もう一緒に暮らすのは決定なんだからあきらめろ」

「うッ」

なんかものすごくキツパリした女だな、凄い迫力。

「・・・わかりましたよ。なんにせよ拾ってくれたことには感謝しています。・・・アリガトウ。えっ」と

「なんだ？」

「あの、名前・・・」

「そういえば、お互いまだだったか。じゃあ、改めて。私はセナ。よろしく、新しい同居人。そして・・・」

自分の紹介が終わるとセナさんが先ほどのムカツク女に目をむける。恐らくはお前もやれという意味表示なんだろう。

あの女はしばらくは納得がいかないという顔をしていたがやがて面倒くさそうに、

「朝岡真理。・・・一応、一番の責任者やってる」

と、かなり信じられない紹介してくれた。

この女が責任者って、おいおい本当に大丈夫なんだろうか。

「でつ、最後が」

セナさんはそう言いながら一番後ろを歩いていた白い人物を見る。

「セレナ」

「以上で私たちの紹介は終わりだ」

えゝセレナって名前だけじゃん、なんか他にないのかよ。

まあ、どうもたいしたことないけど。

「で、お前は？」

「えっ？」

「だから、お前の名前だ。一応聞いてはいるけど自分の名前くらい自分で言わないとな。それともなんだ、私たちにだけ名乗らせておいて自分のことは聞くななんて言うつもりなのか？」

「むっ、そんなわけないじゃないですか！ユウ。それが僕の名前です。これから皆さんのお世話になります。どうぞ、お願いします」
自分なりの精一杯の誠意。

変なヤツラだけどこれからは一緒に暮らすんだからやっぱ、最初くらいはちゃんとしないと。

それにしても僕、こんなヤツラと一緒にうまくやっていけるんだろうか？

第12話！！（後書き）

人物紹介2

・男

モノの魂が見える謎の男性
年齢三十代後半～四十代前半
ユウを真理達にあずける。

・ユウ

真理たちに拾われた謎の少年
年齢14歳くらい

第13話！！

「ボロボロですね」

それが新しく暮らすこととなる家を見ての僕の一言だった。

いや本当、いったい何をどうしたらこのような惨状になるか教えてほしい。

なんなんだ、コレは・・・。

「失礼なヤツね。仮にも私たちの家なのよ少しは言葉を選びなさいよ」

そう憤る真理さんの反応はもつともなんだが、

「いや、でも、こうも壊れているとそれしか言葉が出ないといいますか・・・そもそもなんでこんなことに？」

本当に不思議だ。

玄関なんて屋根が吹っ飛んでしまっている、一体ここで何があったのだろうか？

隕石でも落ちてきた？

いやいや、まさか・・・

なら爆撃？

いや、こんな普通の家にありえないだろう。

なら一体？

チラリと真理さんを見る。

なんだかとても気まずそうな顔をしている。

なんなんだ？

まさか、僕には想像できない程恐ろしいことが起きたとでもいうのか。

「ああ、ここは先日真理が突っ込んで壊したんだ」

「つて、犯人はアンタかよ!!」

ああ、僕ってこんな大きな声でたんだ。

「むっ、なによ」。別に私だって壊そうと思ってやった訳じゃないのよ。間が悪かったっていうか・・・そう! あれは事故! 不幸な事故だったのよ!!!」

「こんなの普通壊そうと思ったってできませんよ!!!」

ああ、そういえばこの人達人間じゃなかったんだっけ?

「どうしたのよ? そんなげんりした顔して」

「いえ、もういいです。なんか諦めが付きましたから」

人生諦めが肝心、まさに今使うべき言葉だと思う。

むしろそう思わないと僕のキャパシティーはとくにオーバーしてしまいそうだ。

「なんか本当にとんでもない所に来てしまったようだ」

「うん? なんかいった」

「別に」

「そう、なら入りましたようか我らの城へ」

城というより潰れかけの小屋のように感じるのは僕だけなんだろう
他二名はその発言を華麗にスルーすると家の中に入っていた。

「中は意外と綺麗なんですね」

何とも平凡極まりない普通の感想だが、外のあの惨状と比べれば室内は十分すぎるほど整理整頓をされていた。

てつきりゴミ屋敷的のものを想像していたこちらとしてはいささか拍子抜けだ・・・いや、もちろんゴミ屋敷に住みたいっていう訳じゃないからな。

ソファ―に清潔感漂う白い机、床もまるで磨き上げたかのようにピカピカだ。

部屋に施された装飾品にもセンスの良さを感じる。

「綺麗なのは当たり前でしょ。私たちが住んでるのよ。アンター体どんな部屋を想像していたワケ？」

「いつ、いや、それはですね……」

意地悪そうに笑う真理さん。

その眼はなんだかこちらの内面を覗き見るほど鋭く少しばかり怖く感じた。

「真理、偉そうにするな。この家の管理を行っているのは私一人じゃないか。お前とセレナは私が掃除をしてもダラダラ寝ているだけだろう」

「ちょ！今ここでそんなこと言わなくてもいいでしょ！せつかく私の株上げようと思ったのに」

「真理、ものすごく今更な気がするぞ」

もおー、と怒る真理さんを軽くあしらうセナさん。

この二人、イガミあっているようだけれどもしかしてものすごく仲が良かったりする？

そして真理さんやっぱり何もしていなかったんですね。

まあ、これ言ったら後が怖いので言及はやめとこ。

それより今気になることは。

「ところで僕の部屋ってどこなんでしょうか？そろそろ案内してほしいのですが」

いつまでも真理さんとセナさんの言い争いを聞くのも面倒なのでとりあえずは話を変える目的もありそう切り出してみる。

僕ごときの言葉でこの二人が言い争いを辞めるとは思えなかったが二人ともやはり本気ではなかったようで思いのほかあっさりと口論

は終了した。

「うん？そっいえばまだ教えていなかったけ、お前の部屋？ほら、あれだよあれ」

セナさんの細く白い指がさす方向にある白いドア。

位置的にはちょうど階段の真下のある部屋だ。

「なんか某魔法使い映画の主人公の部屋みたいですね」

ああ、そっいえばあの主人公も居候だっけ？

そんなことを考えながら扉を開く。

部屋の中は薄暗くかび臭い。

どうやら何年も使われていないようだ。

そして部屋には使われている気配のない椅子や台などが綺麗に収納されていた。

「あの〜ここって・・・」

「ああ、物置部屋だな。今日からここがお前の部屋だ」

「なっ!？」

「良かったじゃないかユウ。もしかしたら近いうちに魔法学校に誘われるかもだぞ」

驚愕する僕にセナさんはそんな冗談を言い、それを近くで見っていた真理さんは床に伏せ笑い転げていた。

第14話!!

重い!!

流れる汗が目に入って痛い。

どうして僕がこんな目にあっているんだ?

両手には袋からあふれんとするばかりの食材が入った荷物。

こんなものを持って歩く自分はさぞかし無様な格好をしているのだから。

「真理さん、何なんですこの荷物。なんかものすごい量の食材が入っているんですけど」

僕の数歩手前を歩く女性、朝岡真理さんにそんなことを聞く。

「っていうかこの人に連れ出されたのだからこの人に聞くしかないのだけだ。」

「なにつて、これからやるアンタの歓迎パーティーの準備に決まってるじゃない。ふふ、喜ばない」

「パーティーって、なんでそんなこと」

「なんでってアンタ、こうゆうのはまず形からはいるべきでしょ。」

それともなに、せっかく私たちが歓迎会を開いてあげようってのになにか不満でもあるワケ?」

「いえ別に不満は・・・」

そう、別に歓迎会については何も不満はない、むしろありがたいくらいだ。

不満があるとすれば、なぜその歓迎会の主役に荷物持ちをさせているか・・・。

本当によくわからない。

そうこうしているうちに家に到着した。

食材をテーブルに並べるなか僕には素朴な疑問がわいていた。

「ところで真理さん、コレだけの食材いたい誰が調理するんですか？まさか、真理さんじゃないですよね」

「むっ、それとおゆう意味？まっ、たしかに私が作るわけじゃないけど」

「・・・セナよ、セナ！この前アイツも言ってたでしょ、この家の管理は自分がやっているって」

ああ、そういえばこの前そんな話をしたような。

「でもなんか意外ですよ。セナさんそんなことするようには見えないのに」

「そうそう、アイツ顔に似合わずけっこう家庭的なのよね。男ウケでも狙ってたのかしら。美人で家庭的な女って」

「ハハ、セナさんはそんなこと考えてないと思いますけど」

「なにを下らない話をしている」

突然の声に身をびくりと震わす僕と真理さん。

まあ、それが誰なのかは言うまでもなくて。

「セナさん帰っていたんですか」

「ああ、今な。それより雑談している暇があるなら早く食材をしまつてくれ。この暑さだからな、せっかく買ってきてても痛んでしまつたら元もこないだろう」

「それはそうですね・・・」

チラリと台に並ぶ食材を見る。

肉や野菜が所せましに並ぶそれは十人前は余裕で作れそうな量だ。

「こんなに買い込んでどうするんです？いくらなんでもこれだけの量、僕たちだけでは」

「心配するな、ちゃんと片付くさ残らずに。それよりも食べたいものは先に自分の皿に取っておけよ、下手したら食事にありつけない

かもしれないからな」

「？あの、それはどおゆう・・・」

「さあ、話はここまでだ早く準備に取り掛からないと夕食に合わないからな。ほらその二人、邪魔だから出ていけ」

もう取り合う気はないらしく、セナさんは早くも料理の支度を始めている。

訳も分からず台所を後にする僕だったが数十分後セナさんの言葉の意味を知ることになった。

第15話！！

みなさんはブラックホールというものをご存じだろうか？

全てを吸い込む穴、実際はそうではないのだけど今、僕の目の前にあるにはまさしくソレだった。

「一体どうゆう胃袋してるんですか・・・」

やっと絞り出した声は自分でも分かるくらいに引いていた。

しかしそれも致し方のないことだ、なんせつい8分ほど前まで目の前にあった十人前はあろうかという料理の数々が今は一つとして存在していないのだから。

コレは何かの魔法かとさえ思う。

いや現実から目を背けのはよそう、今の状況をしかと受け止めるのだ！

だけどコレだけの量を一人でたいらげてしまう真理さんって・・・。
そして、コレだけ食べているのかかわらずさらにデザートを探し求める姿にはもはや恐怖すら覚えてしまう。

「やっぱり真理さんって人外なんですね」

そんなことをついもらす僕の隣で人並みの食事を終え、お茶をすすめるセナさんの

「今日はまだましの方さ、食べるときは冷蔵庫の中身丸々飲み込むからな真理は」

その語りに青ざめる僕でした。

朝岡真理、恐るべし！！！！

「そつえばセレナさん結局部屋から出てきませんでしたね」

真理さんの食事騒動を終え、後片付けの中セナさんに渡された食器

をしまいながらそんな事を呟く。

気にはなっていたのだ。

あの時、食事自体は十人前ほどあったのに出された食器は三人前だった。

つまり、僕とセナさんと真理さんの分。

セレナさんの分は初めから用意されておらず、セレナさんも部屋から出てくることは最後までなかった。

正直こうゆうのは居心地が悪い。

食事をとっていない人がいるのに自分だけが食事をとるなんて言うのはなんか悪い気がする。しょう。

これが余分な感情だとわかってはいたけど口にせずにはいられなかった。

「別にいつもの何時ものことだ。セレナは食事なんてとらないよ、そうゆうやつなんだアイツは。だから、お前はいちいちそんなこと気にしないでいいんだ」

それは僕を気遣ったことなんだろうか？

それともセレナさんの事を突き放しているだけなのだろうか？

無表情なセナさんからは真意がつかめない。

「.....」

「.....」

沈黙が続く。

後によく言葉が見つからず、話が途絶えてしまう。

こんな時なんといえはいいかわからない。

それでも無理に会話を続けようとして、

「あの、料理、僕に教えてくれませんか？」

なんてことを口にしてしまっていた。

「えっ？」

「いや、僕だつて一緒に住むんだからなにか、料理とか手伝えたらいいかな、なんて思ったりして。ハハ」

「・・・まあ、手伝ってくれるのはありがたいけど、お前どのくらい出来るの?」

「その、インスタントくらいかな?」

「・・・」

あれ?

どうしよう、セナさんが物凄く冷たい目線をこっちに向けてくる。呆れてるのかな?

怒ってるのかな?

うつうつ、どっちにしる物凄く怖いよ。

「ハアー、よくそんなに料理を習いたいなんて言えたな。いや、そんなんだから習いたいと思ったのか?まあ、私としてはどちらでもいいけど」

「あの、それで・・・」

「いいよ別に。断る理由もないしな。ただし、私から習うからには絶対上達してもらうからな!成長しませんなんて言ってみる死刑だからな。わかったか!」

「えっ、はっはい!頑張ってみんながおいしいって言うてくれる料理を作ります!セレナさんもきつと食べてくれるような」

僕のその言葉にセナさんは一瞬、複雑そうな表情をしたがすぐに

「ああ、がんばれよ」

と、答えてくれた。

あいも変わらず無表情だったけどそこにはたしかに優しさが感じられた。

だからこそ思っただ、たとえ人外のものであるうともセナさんは悪い奴じゃない、きつと真理さんやセレナさんだって。

ならもう少しだけこの人たちに近づいてもいいかもしれないと。

第16話！！

月日が流れるのは早い。

この年でこんなことを言うのも変な気がするけれどもこの一か月は本当に時間の流れを早く感じた。

一か月、まだまだこの新しい生活に慣れたとは言えないけれど、セナさんとは料理を通して少しずつ近づけている気がするし、真理さんも最初はぶつぶつ文句を言っていた僕の料理を最近は無言で食べてくれるようになった。

ただセナさんだけはあいも変わらず部屋にこもったまま料理を食べてくれない。

だから今日こそはセナさんにも食べてもらえるような料理を作ろうとスーパーまで買い出しに来たのだが・・・。

「品ぞろえ悪いな、この店」

家から歩いて徒歩五分という近場のスーパー。

安いと聞いたから来ては見たもののどうにも良い食材がない、やはり目先の安さに飛びついたのは失敗だっただろうか？

そう後悔の念を抱きつつもまだと思える食材をカゴに入れていく。おっと、豚肉最後の一つコレは買わなければ！

我先にと豚肉に一直線したところで

「あつ！」

「うん？」

その豚肉を目の前でかすめ取られてしまった

豚肉を手にするその相手はいかにも不良っぽい高校生くらいの男子。目つきが鋭く、そんな気はないのかもしれないけど睨まれているように少し怖い。

「あつ、す、すみません！」

そのせいだろうかつい反射的に謝ってしまった。
しみじみと自分のヘタレさを実感してしまう。

「なんだボウズこれ欲しいのか？」

意外だった、そんなこと聞かれるとは思いつたから。

「えっ、そうですけど、貴方が先に取ったんだし」
ズイと差し出される豚肉。

「やるよ、別に俺はそこまで欲しい訳でもないしな」

「でも・・・」

「いいから、人の親切は受け取った方が得だぜ」

「はあ」

さらに前へとだされた肉をおずおずと受け取る。

「にしても結構な量だなボウズ一人で食うのか？」

「いえ、他にも」

「まあそりゃそうだな。この量だしパーティーでもやんのか？十
五人前はありそうだぞ」

すみません、これで四人前なんです。

「かしな」

いきなり奪い取られる買い物力ゴ。

「え！？」

「一人で持つには重いだろ、俺はそんなに荷物ないし持ってやるよ」
「そんな悪いですよ」

「だから、人の親切は素直に受け取れって。ガキなんだからこの位
気にすんな」

そう言うた僕の言い分なんて聞きもせず歩きだし、途中何かを思い
出したかのように振り返ったり、

「そういえば、オメ 名前は？」

なんてことを聞いてきた。

「えっ、ユウって言いますけど」

「ユウ？変わった名前だな」

ほっとけ。

「ここであつたのも何かの縁だよろしくなユウ。俺は桐川洋助っていうんだ。ここいらじゃけっこう顔もきくしなんか困ったらいつでも頼れよ」

そう二カつと笑う顔は凄く眩しくて男の僕でも少しドキリとしてしまった。

このなれなれしい男、桐川洋助。

彼も少しずつ非日常へと足を踏み入れる。

第17話！！

―朝岡家―

「やつぱり変よ！」

突如、机を叩きすごむ真理に私は少し驚く。

「なんだいきなり、ビックリするだろうが」

「うんなこと、どうでもいいのよ！！！アンタは変とは思はないわけ？」

「だから何が？」

真理のいつもの主語のない会話にいい加減うんざりしつつも何時王耳を傾けるセナ。

が、これもいつものようにききながすできていた。

だけど、今日はどうやら少し様子が違うようだ。

「ユウの事よ！」

「ユウ？」

その意外な人物の名にセナは目を細める。

「そう、アイツ私たちの正体が人外のモノだと知っても平然としてたでしょ。普通ならもつといういろいろアクションとかあるんじゃない？なのにアイツはこの一か月を何事もないかのように過ごしてきた、これは異常よ！」

「単に私たちが人外であることを信じてないだけじゃないのか？普通に考えてそんなことをあつさり信じる奴の方がどうかしているだろ」

「私も初めはそう思っていた。だけどこの一か月アイツは見てきたはずよその眼で、私たちの人ならざるところを。あんなもの見せつけられたんじゃないやどんなに頭が平和ボケしている奴でも、私たちが普

通じゃないって事くらいわかるもんでしょ!？」

確かにとセナも思う。

この一か月ユウは初日の玄関の惨状を初めその眼で多くの異常を見
てきた。

まあ、その原因のほとんどは真理の無鉄砲さにあるのだが。
だとしてもあれを見て何も感じないというのは確かに変・・・か。

「どう思うセナ？」

「さあな、余り詮索すべきじゃないだろ、個人的な事だしな」

「フン、相変わらず無関心ね」

「とにかく、私たちが関わる事じゃない・・・今は」

「へーじゃあお前、今は知らないねーちゃん達と暮らしてるのか」
ズイと身を乗り出してくる桐川洋助。

九月になったものの、まだ暑いせいだろう、彼の体は少し汗臭くユ
ウは顔をしかめる。

「まあ、そうですね」

「くっはー。うらやましいねえー。そんな美女たちと暮らせるなん
て」

「そんないいもんじゃないですよ。あの人達自分の身の回りの事な
んて一切しないでそれを全部僕に押し付けるんですもん」

唯一手伝ってくれるセナさんはいろいろ厳しいし。

「とにかく結構大変なんですって!」

「バーカ。いいかい女っていうのはそれだけで宝だ。そんな宝と
一緒に居られるんだからそれだけで幸せと思えってんだよ。まった

く、そんなこともわからんとは、まだまだお子ちゃまだなユウも」
洋助の子ども扱いに少しむくれるユウだったがここはその気持ちを
抑えることにする。

こんな年上の人と揉めても勝てないし。

「なら兄さんも十分幸せってこと？」

その声に反応するかのようにハァーと止め息を吐く洋助さん。

「兄さん？」

洋助さんの事を兄さんと呼ぶ彼女。

いつの間にか僕の隣にいるけど・・・美人と言えば美人だが、な
んか眼元が洋助さんと同じで鋭くて少し怖い。
ヤンキー系の人だろうか？

「なんでお前がここにいんだよ、瑠璃」

「なんでって、兄さんを迎えにきたに決まってるでしょ！買い物に
出て行ったきり二時間もほっつき歩いて！ホラ、帰るよ」

ガツと、腕をつかまれまるで引きずられるかのように連れ去られる
洋助さん。

その途中彼女と目が合う。

「兄さん、こいつ誰？」

「オウ、ユウって言ってなオレのダチだ」

なんか、いつの間にかダチにされてるし・・・。

「えっと、ユウって言いますよろしく」

「・・・桐川瑠璃、ヨロシク」

何だろ酷く冷たい目、もしかしてあまりよく思われていない？
そして洋助さんは引きずられたまま帰って行った。

桐川兄妹か、また変な人たちと知り合ったな。

「おっと、そろそろ僕も帰らないと」

そうして僕は一人夕暮れの道を走って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5152n/>

HEAVEN GATE

2011年11月17日20時16分発行